『ちくま評論選』解説

1　断片化と全体　　港千尋

〔はじめに〕

三つの目標を置き、錬成してほしい。

1　評論を通じて、読み取りの技法をからだで覚える。

2　「説明する」ための方法を習得する。

3　テキストの主旨をふまえて、考えを論述する練習を行う。

「1」の読解技法によって、センター試験のような選択肢式の大学入学試験に対応できるようになるだろう。「2」は、二次試験の形式に対応している。「3」は、小論文対策として必要になる練習である。…と、まずは、いえる。

が、実際は、この三つはたんに形式の違いを示しているのではない。たしかに、それぞれ独自の「コツ」と呼べるものがあり、私たちはそれを学ぶ。しかし、それらはバラバラに切り離されたものではない。

「私は1までいい」「私は2はいらない。3がいる」といった考え方はやめておこう。それは次のような理由による。

私たちは、文章を読んで、わかった！というとき、同時に心動かされ、心の中で何かことばを発している。そして、そのことをだれかに伝えたくなる。読んで理解し（読解）、それはこういうことなんだと自分のことばに置き換え（説明）、そこから自分の感想や考えを述べようとする（論述）ということは、ほぼ一挙に、同時に生じる。

ここで読んでいく文章は、現在の先端的な問題意識や人間にとって根底的な問題を含んでいる。はじめのうちは少々骨を折るだろう。しかし、ほんとうにものを考えようという姿勢さえ身につけば、今いった三位一体の洞察を必ず体験できる。その日は必ず来ると信じて粘り強く文章を追跡しよう。

■凡例

1　●は、本文。①②…は形式段落番号。◆は、設問。

2　▽は、本文の追跡・分析。（解答例だけではなく、ここをこそ、読む。）

3　▼は、読解に関する技法。

4　☆は、記述に関する技法。

■前提　『現代文キーワード』で知識を押さえよ。（後から読んでもよい）

・第二章「科学」の「要素論」を読め。

・さらに「第2部頻出テーマ編」の「自己／他者」「身体論」も大いに関係する。

■追跡

①　いったいいつ頃から、科学は自然を描かなくなったのだろう。チャールズ・ダーウィンがビーグル号にのって太平洋を横断していた頃はまだ、観察とデッサンが主流だった。一八世紀から一九世紀にかけて描かれた数々の素晴らしい博物画を見ていると、肉眼で観察し、それを手によって紙の上に移すことの大切さを思う。細部に注がれる眼差しの的確さと同時に、常に全体を把握する心を感じるのだ。

▽近代科学は、「自然を観察し、記述する」ことから発達した。細部を見ようとするまなざし、全体をとらえようとするまなざし。顕微鏡のまなざしと望遠鏡のまなざし。その二つが合わさっているのが、近代＝科学のものの見方だった。これが前提。**問い**は冒頭、「科学は自然を全体として描かなくなった。なぜ？」。

▼読みのスタート＝**問い**を見つけようと意識する。問いは必ずある。

②　やはり写真術の誕生が、自然のイメージを根本から変えてしまったのかもしれない。1さらにコンピュータの登場が、自然科学の方法論を大きく変化させている。肉体をもった人間は街角を歩いているが、彼または彼女は同時に、コンピュータのなかにも存在している。ヒトゲノム解析プロジェクトの驚くほど早い進展をもたらしたのは高速解読装置の開発だった。人間は自分自身がゲノムという単位に還元されることになった。いまや「自然」はデータとしてコンピュータのなかにも存在している。人間だけではない。地球の生態系や気象もまたそっくりそのままコンピュータ・グラフィックスによるモデルとして存在している。宇宙の涯てまでがデータとなって公開されている。

▼**キーワード**に注目＝「還元」（『現キー』「基本」にあり）は、細かく分解すること。「データ」が鍵。こういう語には線を引く。

「データ」とは、ここでは特にデジタル（数値の）データを指している。コンピュータで扱える形式に変換されたもの。「人間がコンピュータの中にいる」とは、データとして存在している、ということだ。「科学は、自然を全体として描かなくなり、データとしてコンピュータに保存するようになった」っていうことかな、と流れをたどりつつ読み進める。

③　今日の自然はシミュレーションという方法のもとにその姿を見せる。科学はコンピュータのなかに「情報システムとしての自然」をつくりだしているとも言える。顕微鏡や望遠鏡といったレンズの装置を使い、手によって描いていた博物学の時代とは根本的に異なり、野山や動植物にカメラを向けているわたしたちでさえ、もはやそのような仕方では「自然」は見えないと思うほどだ。

▽「シミュレーション」は先の「モデル」と同じく、現実と似たような状況をコンピュータの中に作り出すことだ。地震のシミュレーションなど、一般人にもなじみがある。「情報システムとしての自然」は、知覚を超えている。データによって、見えない自然のダイナミズムを見えるようにしている、といってもいい。

④「自然の写し」とはいったい何だろう。「自然を描く」ことは可能なのだろうか。地球丸ごと情報化がそこまで来ている。レンズを通して自然を認識していた「光の時代」から、コンピュータのなかに自然を丸ごとデータ化するという「記憶の時代」へ。地球全体がデータとして複製され、それを研究するという◆1方法論的な大転換である。観察や認識といった概念は近代西欧において発達し、写真術において頂点をみる一九世紀の視覚装置を内包していた。今日の情報データという「第二の自然」は、そ

れとは異なるモデルを要請する。それは全体ではなく断片としてしか存在しない自然である。わたしたち人間も当然、この自然の内にある。

▽脚問1は、ここまでの確認のための問い。**☆まず傍線部をかみ砕いて**から、整理しよう。「自然を研究する方法が大きく変わったこと」。こうすると、「**自然を研究する方法が、AからBに変わったこと**」というふうに記述すればいいのだ、ということが、はっきりする。「光から記憶へ」では何のことかわからないので、具体的に書く。

A＝肉眼や（顕微鏡や望遠鏡といった）レンズを通して認識した自然を研究する方法。B＝データとしてコンピュータに複製した自然を研究する方法。

⑤　テキストもイメージも、かつてなかったような速度でこの地球を覆っている。遍在するデジタルデータは、どこからでも得ることができる。自分の撮影した写真も過去の写真も、デジタル化されネットワークを流通している。イメージは徹底的に、物理的な制約から自由になった。デジタル・イメージには、「大きさ」や「全体」という概念がない。携帯電話で撮影したイメージを、スタジアムの巨大スクリーンで見ることもできる。一枚の写真からあるいは一本の映画から、望みの部分だけを取り出すこともできるし、オペラの一曲だけをあるいは小説の一章だけをダウンロードすることもできる。芸術作品が前提としていた、2ある一定の大きさや長さをもつ「全体」が消えようとしている。

▽**▼例によって読め。**傍線部が「抽象的」に表現された部分。「全体がない」といわれると、イメージしにくいが、前後の例を読めば、実感できる。たとえば、インターネットの「全体」なんて、思い浮かべることができない。

自然あるいは世界のデータ化とは、断片化である。断片であるデータが、浮遊し、ぐるぐる回っているのだが、そのため、「全体」は感じ取れない。データは「検索」すれば、出現し、リンクし合っているが、中心もなければ、境界もない。

⑥「断片」の集まりが全体をつくるのではない。断片はそれ自体、完結している。携帯電話のメールや会話が、非常に断片的なものになっているという指摘は、ずいぶん前からあったが、◆2正確に言えば、断片化したのではない。断片としてしか存在できないような様式が主流となっているのである。自然がそうであり、社会がそうであり、個人がそうである。全体とは別に存在する断片という、わたしたちがまだその実体や性質を正確に把握しているわけではない何かが、着実にこの地球を覆っているのだ。

▽ていねいに言い直せるだろうか。ふつうは、断片＝部分が集まって全体になると考えられているが、デジタル・データという「断片」（かぎかっこ付き）は、それらがいくら集まっても「全体」にはならない。それらが集まっても全体にならないような種類の「断片」。逆の言い方もできる。「全体」がまずあって、その一部が断片として存在している、とふつうは考えてきたが、デジタル・データにとって、その〈親分〉である「全体」は存在しない。国があって、町があって、個人がいる、といった関係は、デジタル・データの世界にはない。

◆2「携帯電話のメールや会話は、初めから断片としてしか存在できないような様式として存在しているということ。」

自然も社会も個人も、初めから断片としてしか存在できないような様式として捉えられているのが現在だ、と筆者はいう。コミュニケーションについても、絵文字一つだけ、とか、スタンプの羅列とか、ツイートもそうだが、一続きのまとまった「お話（伝えたいこと）」の一部をやりとりしているというよりは、脈絡のない断片が飛び交っている。考えれば、ツイッターやラインはそもそも、書籍やブログのような言葉の「長さ」を想定していない。その設計は、初めから、「断片」しか生み出せない。そして、そのしくみがここまで広がっているのは、「断片というスタイル（様式・型）」こそが、現在に適合しているからだ。

⑦　物事の全体は、部分の集合として捉えることができる。**しかし**いまわたしが問題にしようとしている断片は、そのような意味での部分ではない。◆3ゲノムは部分ではない。あらゆる生命はゲノムという「情報」として理解できるというが、**しかし**生命という全体はゲノムの集合ではない。臓器移植がどこまで進んでも、ひとつの人格をもった人間と、器官の集合としての身体は、別のものである。生命には環境と切り結びながら、時間の流れのなかで、ある種の統一を保持するという重要な性質がある。それをわたしたちは経験と呼ぶ。この経験を担うのが全体である。断片は時間のなかでの統一を保持しない。

▽**▼指示内容を補充せよ。**基本的な〈技法〉だが、ここのように、設問に絡んでいるようなとき、また、難解だな、と思ったときには、正確に確かめておく必要がある。「…問題にしようとしている断片は、そのような意味での部分ではない」とは？　直前を見て、「問題にしようとしている〈断片〉とは、それを集合させれば、何かの全体になるという意味での〈部分〉とは別のものだ」と言い換えられる。

問いになっている「ゲノムは部分ではない」にも、それを当てはめることができる。「ゲノムは、それを集合させれば、（一つの人格を持った人間という）全体になるという意味の部分ではない」と言い換えられる。問いは「なぜか」と聞かれているから、

◆3「部分とはそれを集合させれば全体になるものをいうが、（ヒトの）ゲノムは、それを集合させても、一つの人格を持った人間という全体にはならないから。」

などと答えることができる。

生命とは、時間の流れの中で統一を保つもの、という表現もよく理解したい。筆者は、統一を保つべく、外界とインプット／アウトプットを繰り返すことを〈経験〉と呼んでいる。息を吸う／吐く、といったことだ。ここには、内／外の境界が前提とされている。その境界に包まれて、〈経験〉によって統一を保っているのが、〈全体〉。統一が失われたときが、〈死〉。個々の生物だけではなく、生態系とか、社会とか、この惑星全体なども、この〈生命〉の概念に含まれることがわかる。

いくら〈断片〉というスタイルが主流になったとしても、わたしたちが生命（統一のある人格）であることには、変わりがない。〈断片〉しかつぶやかなくなった〈私〉、場面場面でキャラという断片を演じている〈私〉であっても、心・身体のどこかで、何らかの統一を欲しているのではないだろうか。

⑧　したがって電子機器が増えれば増えるほどに、「全体」の幻想が求められるようになる。最新の携帯電話と電子メールを使いこなしていても、幼少期に使っていたモ

ノをとても大切にしている人は多い。無機的に見える情報機器と人形やぬいぐるみといった、皮膚感覚を喚起するモノが、矛盾することなく同居している光景がどこの国に行っても見られる。

▽「全体」の幻想」と「皮膚感覚を喚起するモノ」。どういう関係にあるのか？　すぐには結びつかないね。こういう〈論理・連想の谷間〉に要注意。書き手独自の着想や論理が潜んでいるところ。**▼疑問を保って読め。**

⑨　いろいろな心理的理由が考えられる。枕やぬいぐるみを大事にしているからといって、必ずしも幼児化しているわけではないだろう。そうしたモノが、自己の断片をいっとき繋ぎ合わせる役目を果たすのかもしれない。◆4その背景にはおそらく家庭や学校における人間関係の変化があるにちがいない。子どもたちの遊びにコンピュータが入ってからすでに二〇年が経過しようとしている。基本的にボタンを押すだけのゲームから、シミュレータのように全身でコントロールする体感型のマシンへと、ゲームの世界は激しく変化している。ただコンピュータを組み込んでいるゲームは、そこにどのような複雑なストーリーや進化型のプログラムが用意されていようと、最終的にはプログラムに対して何らかのかたちで「反応する」ことで成立している。反応がなければ、これらの遊びは基本的に意味がない。プログラムとのあいだで選択したり、問いかけたり、答えたりすることで、これらのゲームは成り立っているのだ。この「反応」ということに対して、もしかすると、身体がどこかで疲れを感じているのではないか。

▽つながりが見えてきた。断片化した（バラバラになった）〈私〉が、「全体」（一体感）を求める。ぬいぐるみといったモノは、「自己の断片をいっとき繋ぎ合わせる役目を果たすのでは？」。そういう着想だったのだ。

　では、「その背景」の「その」とはなんだろう。情報機器に囲まれてバラバラになった自分をぬいぐるみで癒やしたいと感じることの背景には何がある？　なぜ、そう感じるのか？　筆者の答えは、「身体がどこかで疲れているから。」ゲームなどへの反応のしすぎで疲れているのでは、というのである。問いは、「「その背景」とはどのようなことか」となっている。問いとして、①「その」が何を指すのか、を尋ねているのか、②「その背景」にあるものの内容を尋ねているのか、判然としない。②の答えの例を示しておく。（①②をドッキングさせることも、できるが）

◆4（遊びの相手が人間からゲーム機器に変化し）**情報機器に反応する生活の中で身体が疲れを感じていること。**

⑩　反応時間が短くそして正確なほど、高い得点を取るようにできているゲームは、遊びは遊びでも、かなり高度な刺激／反応プログラムである。実際、フライト・シミュレータやドライビング・シミュレータなどを体験すると、技術的には産業用と区別のつかないような、高度な内容に驚かされる。

▽傍線部がここからの鍵。

⑪　だが考えてみれば、これはゲームに限ったことではない。「反応時間が短くそして正確なほど、高い得点を取るようにできているゲーム」とは、つまるところ現在の教育そのものなのだ。幼稚園から始まる「受験戦争」のために、さまざまな教材が、まさしく◆5「戦争シミュレータ」として用意されているのである。かりにそのような「戦争」をうまく回避しながら成長を続けることが可能でも、義務教育の過程において、「反応時間が短くそして正確なほど、高い得点を取るようにできているゲーム」としてのテストまで回避することは不可能だろう。たとえばある特定の一日に日本全国で数十万人の学生が、まったく同じ時刻にまったく同じ問題を解くという試験は、見方によってはそのような「ゲーム」の最たるものかもしれない。そこではマーク・シートと呼ばれるマス目を制限時間の内に、正確に塗りつぶすことが要求される。厳密に決定された環境のなかで行われる巨大な「マスゲーム」。それを支えているのも、つまるところ「反応時間が短くそして正確なほど、高い得点を取るようにできているゲーム」を通して形成された、集団的秩序にほかならない。

▽これは、説明不要なほど、実感のあるところでは？　「早くて正確ゲーム」＝（マーク式テストがゴールであるかのような）「現在の教育」。マーク試験は、ゲームみたいに楽しくない（？）けど。

　◆5「戦争シミュレータ」とは何のことか。シミュレータは、注によると、「模擬装置」と訳すようだ。それなら「戦争を模擬的に体験する装置」とでもいうことができる。ここでは、**☆傍線部を延長する**ことによって、具体的に言い直すといい。「さまざまな教材が、「受験戦争」のために、「戦争シミュレータ」として用意されている」という全体を「戦争シミュレータ」に代入できるように組み替える。

◆5　「受験戦争に勝つために、それを模擬的に体験する装置としての教材。」

⑫　刺激に対して一義的な反応を要求するものばかりではないにせよ、「効率」と「秩序」を最重要と考える社会にとって、まず要求されるのは解答能力である。それはあくまで与えられた問題に対する解答能力であって、かならずしも応答能力ではない。もし教育プロセスの大半が◆6その能力の向上のために使われているとすれば、3そこから逃れたいという欲望がでてきたとしても不思議はないであろう。刺激／反応のサイクルから一時的に避難する場所にはいろいろあろうが、フェティシズムもそのひとつである。

▽**「◆6その能力」＝「与えられた問題に対する解答能力。」**これは問題なかろう。

⑬　効率ゲームが「ボタンを押す」という単純極まりない動作に集約されるとすれば、フェティシズムはそれに対するアンチテーゼとして機能する。それは刺激／反応のサイクルのなかで分断された自己を統合するために、ある種の連続性によって「包みこむ」。母親の記憶と結びついている、毛布やぬいぐるみのようなモノだけではない。直接の結びつきをもたない対象であっても、そこに何らかの意味で全体的機能を見出だすことができる。

▽「情報機器」が増えると「ぬいぐるみ」みたいなものが求められる。それはなぜ？

　…という問いに対する答えがここ。「情報機器」が増える→「即レス」の繰り返しで自分がバラバラになった感じ→それを統合し、包み込んでくれる感じのするものを求める→母の胎内に包み込まれ、赤ちゃんとして抱かれていたときの記憶と結びつく

「ぬいぐるみ」などを無意識に求める。こういう理路だ。

「フェティシズム」は、『現キー』では、「事物それ自体をあがめること」とある。こういう、定義が実践的なのだ。紙幣はただの紙切れで、それをなにかと交換することで意味が発生するが、紙幣そのものを指舐めながら数えてにんまりするっていうのは、紙幣自体に快感を感じるようになってしまったからだ。こういう回路の形成がフェチってこと。めがねをかけてた彼女が好きになったことが、めがねを見ただけで、キュンとなる回路を形成したとしたら、それはめがねフェティシズム。

ぬいぐるみは、母の安心感の記憶を呼び覚まし、一つの私に戻った（全体的機能を取り戻した）という感覚をもたらす回路を導く。「X」が、母の安心感の記憶を呼び覚まし、全体的機能を取り戻したという感覚をもたらす、という作用するなら、その「X」は、ぬいぐみでなくても何でもいい。例えば、ここには、「ナショナリズム」のような、形のないことがらが入ってもいいわけである。

■読解問題

1 「さらにコンピュータの登場が、自然科学の方法論を大きく変化させている。」とあるが、どのような変化か。

説明とは言い換え。ここでは、**☆そのまんま式**がおすすめ。傍線部の語句をそのまんま使って、とりあえず、解答の形を作ってしまうんだ。

「コンピュータの登場によって、自然科学の方法が大きく変化したということ。」

いったん、こうしておくと、言葉を補ったり、言い換えたりしても、「日本語が崩れてしまう」という致命的な状態は避けることができる。ちょっと安心なんだ。「変化」の説明なので、「～から、～へ変化したということ」という形になるな、ということもわかる。ここは「方法」の変化なので、対象の変化（何を）、手段の変化（どのように）、をきちんと意識して織り込むことが大事。▼〈自然そのものを、肉眼や顕微鏡・望遠鏡などで観察する方法〉から〈自然についてのデータを、コンピュータを使ってシミュレートする方法〉へ。

【解答例】（コンピュータが急速に発達したために）**自然科学の研究方法が、自然そのものを、肉眼や顕微鏡・望遠鏡などで観察する方法から、自然についてのデータを、コンピュータを使ってシミュレートする方法へ変化したこと。**

2 「ある一定の大きさや長さをもつ「全体」が消えようとしている。」のはなぜか。

逆に、かつてはなぜ、芸術作品は、ある一定の大きさや長さをもつ「全体」を前提としていたのか、と考えるとよい。絵でも音楽でも、そこにはある物理的制約があった。その絵は、そこにしかない。その曲を聴くには、そこに行くしかない。その自然を見るにはそこに行くしかないのと同じように。〈現物〉は、その特定の時空に、たった一つ存在していたのである。

しかし、あらゆるものが〈複製〉できるようになった。さらにデジタル技術は、複製に際して、「携帯電話で撮影したイメージを、スタジアムの巨大スクリーンで映す」

とか「望みの部分だけの取り出し」とか「データへの変換」といった加工を容易にした。（※これに関連する、『現キー』「メディア・芸術論」を必ず読もう。）

「なぜか」と聞かれると、深読みしたくなるが、書かれている範囲でしか答えられない。**☆「なぜ→どのように」と変換**して考えよう。どのように、消えてきたか、と問い直すと答えやすい。文末だけは「から。」にして！

【解答例】かつては自然や芸術作品などは、実際の大きさや長さをもつ実物としてしか捉えられなかったが、それらがデジタル・イメージとして複製できるようになり、拡大や縮小、分割が自由自在になったため、確かな全体を捉えようとする意識が薄くなっているから。

全体という考え方・概念が消えかけている、という表現にしている。

3 「そこから逃れたいという欲望がでてきたとしても不思議はないであろう。」とあるが、現代の教育と電子機器に共通する点は何か。

どうして、ここに傍線が引かれてるのか、ちと疑問だけど（じゃない？）。聞きたいのはおそらく、「現代の教育と電子機器に共通する何か」が、そこ（＝早く正確に解答する能力の訓練）から逃れたいという気持ちを呼び起こすんだけど、その何かって何？っていうことだろう。「そこ」の指示内容を聞いてるわけじゃないので注意。

最後の設問なので、**▼全体の流れを見渡そう**。「何か」が起きているので、「全体」の回復を求めるようになっている。これが見取り図だ。そう考えれば、「何か」＝**断片化**であることは一目瞭然。これが主題でした！ すると答えはこうなる。

電子機器も、現代の教育も、人間を**断片化**する点。

これは、**☆とりあえずつくる**という技法。とりあえず、このように簡潔にメモし、→ていねいに補足していく。断片化という語でくくれるけれど、それぞれがどのように断片化を招いているのか、を補うことになる。例えば、

【解答例】電子機器は、デジタル・データで世界を覆うことによって、一方、現代の教育は、刺激に対して早く正確に反応する訓練を繰り返すことによって、人間から全体への意識や統一感を奪い、断片的な存在にする点。

〈全体〉（統一）が失われ、〈断片〉（バラバラ）になっちゃったが、やっぱり、どこかで〈全体〉を求めている。　本文全体の要旨をこの程度につかめれば、読めたということだし、二〇〇字で全体をまとめよ、といった問いが出てもどこをどう組み立てればよいのか、間違うことはない。

この要旨は、他の文章でも、よく目にする。グローバル化なんていう視点からも同じようなことが論じられる。〈国民国家〉の枠組み（統一）が事実上失われ（細胞膜が破れたみたいな状態）、バラバラに情報（や「自分」、「自分」のお金）が地球上に流れ出る事態になっているが、だから逆に、統一とか安心を求める心情が高まっている。そんな論旨だ。

安心や安全を求めるのは当然だが、求め方を誤ると、まずいことになる。現代の課題だ。（追。安心と安全は違う。安全だけど安心じゃないという状況はあり得る）